九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 江戸時代上方における童話本

中村, 幸彦

https://doi.org/10.15017/2332839

出版情報：文學研究. 59, pp.31-52, 1960-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

江戸時代

# 上方における童話本

中村幸彦

## 一

江戸時代の童話や童話本を説明する際に、専ら江戸の赤本・黒本・青本など草雙紙中のそれを引くのが例（小池藤五郎氏「少年文学の源流としての行成表紙本・赤本・黒本・青本」―国語と国文学三百四、市古貞次氏「御伽草子と近世の児童物語」―文学昭和二十六年八月号）となって、あたかも、それ以外に童話本が無かったかの感がある。しかし上方筋にも、それらに相似た童話の絵本が出版されてゐた。絵画の方面には、全く暗い私ではあるがその紹介あることを見聞しないので、以下に簡略な紹介の筆をとることにする。上方では、この童話本をも含めて、この種絵入の本を、一括して「絵本」と称する。当時の書籍目録類にも「絵本」の部に分類し、各書肆の出版目録にも「絵本類書目」などと見える。江戸の草雙紙は中本で、一冊五丁前後―後には五丁に一定―で、一冊から数冊に及ぶ分量なのに対して、上方の絵本は半紙本、一冊十丁近くで、大体は一冊から二、三冊どまりで一部となってゐる。ただし、ここで採り上げる童話などの一群は、例へば仲田勝之助氏著「絵本の研究」に収載され、京の西川祐信や大阪の橘守国などが画いた、当時の所謂「風流絵本」、今日からしてもやや美術的鑑賞に耐へ得る風俗の絵本類を除いたものである。述作、画作においても芸術的な意識は殆ど働かない、全く娯楽・実用的で、最も教養度の低い層の為に出版された、庶民的な類である。江戸時代では、一般の児童用の書物、従って童話の出版などは、この程度にしか考へられなかったのである。出版界でも、絵画面でも、云はば最底辺にあるこの種絵本のおびただしかったことは、江戸時代の雑本に興味を持つ方々は既に御承知のことと思ふが、同じ性質の江戸の行成表紙本・赤小本、赤本の如くには、古いものも珍重がられず、従って何の整理もほどこされず、研究者は勿論、好事家も放擲したままである。よって明確なことは分らないが、大体、正徳前から行なはれ、明和安永、演劇方面の絵尽しや江戸草雙紙の一盛時に、やはり隆盛期を持ち、絵尽しとは、恐らく絵師を等しくする故であらう、多くは共通の絵風。又前述の美術的絵本の絵師が、両方に筆をとる場合もあった。そして細々と幕末まで、その命脈は続く。古書肆が「かっぱ刷」などと称する類も出た。又隆盛期に出たものの版木を、京都寺町通松原下ル町菊屋喜兵衛・大坂南久宝寺町心済橋筋小林六兵衛など

が所蔵し、多く改題後刷し、長い間需要を満したことも、出版の面から見れば、注目すべき現象である。

## 二

私は「風流絵本」と区別した絵本を、童話などの一群として採り上げようとするのは、その群に童話ではないが児童用の、又は専ら児童用でないが、何分に絵本なので、児童用をも兼ねたと想像出来るものが多いからである。それらの種類やその出版の具体的様相をうかがふことは、この稿の対象たる童話本の環境を知る便があるのでなからうかと考へて、以下に箇条的にかかげて見る。ただし、引く所の書物は例示に過ぎず、僅かの所見の悉くをさへつくしたものではない。

**一、絵づくし類**　普通に、歌舞伎・浄瑠璃の筋書や俳優の役割などを示した絵本を、この名で呼ぶけれども、演劇の絵尽しはここでは全く除外しておく。「風流絵本」の中でも、例へば西川祐信画、随時老人南嶺子（多田南嶺）作の「絵本花の鏡」（寛延三年刊、明和五年再版）が掛物・屏風など室内で見得る絵画づくしである如く、同じ件名に属する事象物象を集めるものもある。この類の絵本もそれらと同趣旨であらうが、ここで採り上げるのは、現在の幼童絵本にも乗物づくし・動物づくしなどと見る所、江戸の赤本にも「是は御存じのばけ物にて御座候」・「鬼の四季あそび」・〔武者づくし〕・〔福神あそび〕（二者仮題）の如きがある類を指す。京都の四季の風景をつくして、この種の絵本で、年代の附記あるものでは早く正徳五乙未年正月吉日に、京寺町二条間町本屋善兵衛版で出てゐる（図説日本文化史大系江戸時代）。なほ次の如きが管見に入った。

○新板えづくしねずみのよめ入　一冊

ねずみのよめ入

画から判断してやや早い頃の出版か。見染めから婚礼の次第、宮参りまで、一貫した筋を持つ、最も普通の鼠の嫁入である。

○四天王土蜘退治　一冊

元文三年初春吉旦園乙州序、堀尾新九郎守保画。土蜘蛛がさまざまの物にばけた末に、四天王が之を退治する筋であるが、ばけ方づくしに主眼を置く。江戸の黒本にも酉年（宝暦三か明和二年）に「頼光土蜘退治」二冊がある。共に前太平記の頼光の条の記事から得た想であるが、いづれが先行し影響したかは明らかでない。一体江戸の草雙紙でもさうだが、化物づくしや、ばけ方づくしは、この類中でも頗る多い。戸隠山の鬼が化粧おさおさおこたらず、維茂とその一行をなやませて、末に退治されるもの。これも

興味は鬼の様々の女粧にある。狐が伝説や昔話の通りの百態を示したもの。義経をめぐる平家の怨霊の跳梁と、源氏の勇士の奮闘をつくしたもの。猿が歴史上の出来事を真似てゐる絵づくし。これは人間世界の画をかかげて比較する。例へば政子が法師姿の景清をとがめる文句に、「あく七兵へかげきよはじんぎをかねしさ。るらいとき く、なんのすがたをかへ、もりものくいにくるものぞ」とおどけた文句を加へてもある。日本と唐の獣類が合戦をするものなど書名は皆不明ながら、様々である。

○懐胎誕生楽　一冊

柱刻に「胎」とあり、別本仮題に「胎内双紙」とする。例の懐胎の初月は不動明王、二月は釈迦如来、三月は文珠菩薩、以下月々で諸仏が請取って、胎児をそだてると云ふ俗説を、面白く図示したのである。これにもその前後は不明ながら、江戸の青本に、同題材の富川房信画作「稲負鳥岩田帯始」がある。この絵づくし類の出版目的は、云はずもがなであるが、当時の書に語らすれば、柱刻「西海」とある一書、武者づくし絵本の序（京都松原通西洞院東入町美濃屋平兵衛板）に、

明わたる長閑けき空のはつ礼や、ものもの声をさきだてゝ、是は珍らかなる絵草紙おさなひさまへ玉物と指出し給はゞ、何より以て御歓び、あなたもこなたもよろこびの数々祝ふ、としの春つきせぬ御代こそめでたけれ

と、幼童向のことを明示する。そしてこの幼童に知識を与へるには恰好な編纂方法の性質上、この類はいつまでも、その命脈を保ったことが十分に想像出来る。それにしてもやや程度の高い、読物性を加味した絵づくし類も出現した。

○絵本亀相喰（えほんきこうのかぶり）　一冊

同じ内容のものが、宮尾しげを氏編「小噺再度目見得」第九冊に「浮世亀相艸」の名で所収。この同類には、「風流亀相笑」、「名言亀相袋」（宮尾氏笑話本目録前期所収）の如きがあり、私もそのいづれかに相当するか「亀相」と柱刻ある別の一冊を見た。亀相喰と亀相艸も、題簽のはり違へか改題であらう。内容は「どじやうじる」を旦那から求められた下男が、道場汁と解して、門徒寺へかけ込んだり、こけら鮨を求められて、木を削ったりするそこつを集めたもので、絵づくし類の中でも特殊な一群をなす。後年になるが、

○為拝伝授御笑鑑（おがませでんじゅみわらひかがみ）　一冊

など「攝陽奇観」巻之四十四所収で、文化二年大阪における開帳の神仏と、それに場所を提供した神仏を大一座にして、芝居を仕組んだ、芝居の絵づくし模倣のものも出現した。ここに絵風から見て後年に属する仮題「玉づくし」なる一本がある。その名の如く、「新玉」「天窓」「親玉」「肝」「生玉」など玉と称するものの絵づくしであるが、その発想は当時流行の見立、即ち大阪の地名の生玉も玉、人気俳優の親玉をも又玉と見做す発想を用ひる。これは江戸でも流行した「絵本見立百化鳥」（宝暦五年）、「風流准仙人（なぞらへせんにん）」（宝暦十年）等の見立絵本と、その洗錬の度は、大人と幼童の差をまざまざと示すが、等しい。ここでこの書を出す理由はしかしその点ではない。その玉に関する画面の一つ一つが、年中行事・福神づくし・芝居絵・故事の説明・武者揃・亀相者・男伊達の様相・狐の嫁入・化物づくしなど、絵づくし類に多い画材題材を選びつくしてゐる。のみならず後述する謎・段々付・狂歌・発句など絵本全体の題材をさへ揃へるの概があるからである。

**二、軽文学類**　ここで軽文学と称するのは、小説の如く多くの言辞をついやし、内容の複雑なものでないの意で、次に掲げる笑話・謎・答話・捩り・狂歌などの一群をさす。ここではその中でそれに相応した絵を配したものなることは勿論である。

(イ)笑話　江戸にも黄表紙の旧版を応用した絵本の笑話本（宮尾しげを氏編「寛政天明絵入小咄」などに所収）が出現するが、この形式では上方が先行したやうである。

○絵本御代の春　二冊

宝暦十一年刊。京都菊屋喜兵衛より後刷（林美一氏校訂「絵本江戸小咄」所収）。この書を宮尾氏の笑話本目録では、宝暦十三年にして、西川祐代画と見える。画風は確に祐代で、十三年にも出刊したか。

○絵本軽口恵方謎　一冊

花月亭（西川）祐代画。宝暦十一年刊。京都菊屋喜兵衛より後刷。

○絵本軽口福笑ひ　二冊

義笑子著。臥仙（大江文坡）序、明和五年、京都寺町松原上ル町菱屋治兵衛等三肆刊（「小噺再度目見得」第十一冊所収）。所見本には後人が長谷川光信画と書入れてある。或はさうであらう。笑話本目録には後に「絵本笑顔袋」と改題されたと云ふ。

○絵本にしきのそら　二冊

所見は大阪の小林六兵衛よりの刊で、明らかに後刷、柱刻「咄」と見える。宮尾氏目録に見える「絵本初春噺の種」の改題か。この類は笑話研究家によって、漸く採り上げられてゐるが、後刷改題の甚しいもので、些々たる小冊子のこと、殆どでたらめで題簽を附したらしく、同内容で異外題、同外題で異内容のものがある。例へば宮尾氏が、「にしきの空」と同内容とされた「立春噺の湊」の名を見返しに記したものと同内容で、柱に「愛」と刻する別本が存する如くである。その序に、「（前略）予が摸写する所は児童のやんちやなみだをとゞめたゞちに笑をふくますること是また絵の徳ならんかし」と、児童向の著述なるを物語る。よって当時江戸の地に漸く盛んならんとする小咄本の笑話に比すれば、この絵本の笑話類は、程度の低いことはやむを得ないのである。

(ロ)謎　赤本にもあるが、江戸より上方の方が流行したか、かなりの数の出版があるやうである。

○謎絵東文字理　二冊

吉原堂雀囀軒著。序に「西川氏の艶なる□□うごきをよせて。児様達の御なぐさみの絵づくしとなす而已」とある。絵を題にして謎をとく趣向。そして序によって酉の年の刊とわかるが、宮尾氏の目録はその酉を享保十四年にあててゐる。

○絵本謎の海　三冊

宜春堂著、難波画工松翠軒長谷川外記光信画。彫工大坂村上浅右衛門、書肆京二條通寺町西江入町鶴屋喜右衛門・大坂伏見両替町天神橋筋糸屋市兵衛版行。この糸屋こと弘昭軒も絵本の版木を長く蔵した一軒である。この書は、普通の「ことづかり文とかけて、つんぼのはなしととく、心は片びんぎじや」風の謎を絵入で集めたもの。

○新謎心の種　一冊

も同様の謎の集。一例「うはき男トかけて、たな鼠トとく、心はしつといふとやむ」で、余り児童向でない題も出てゐる。

(ハ)答話　答話とは「商人と屏風は直ぐに立ぬとやら杓子定規のたとへのごとし、ゆがんではならぬ世に瓜の蔓ばかりはたてゝは生らず」と云った風な警句を、瓜畠の画上に加へるたぐひをさす。その浮世草子の作中にも、かかる種類の警句を頻発する江島其磧には、次の著がある。

○世話教訓絵本答話鑑　三冊
○答話後篇絵本喩艸　三冊

共に西川祐信画で、享保十四、同十六年の刊である。答話鑑の序には「（前略）昔日より口馴し喩を、当世の言葉に直して、その品を絵にあらはし、幼稚の手遊ながら教訓にさとしやすからしめん話の助とする而已」と、児童向の目的を、ここでも掲げてゐる。前に例として引いたのは、

○絵本大和錦　三冊

からである。この書は千里・深蔵著。西川祐信画、寛保三年、文華堂刊。答話は西鶴などにも萌芽があり、今日の漫才などへも流を伝へる、上方特有の言語遊戯と見るべく、その児童版が絵本の姿で出刊されたのである。

(ニ)狂歌・雑俳など　ここに京の菱屋治兵衛刊で「モチリ」と柱刻ある一冊の巻頭は、「通り札、しばいたゞいた、八瀬をんな」として、「夏祭浪花鑑九段続」と看板打った芝居の木戸口と、柴いただいた八瀬女を画く。「浪花鑑」が京で初めて上演を見たのは、延享二年八月のこと（歌舞伎年表）。その直後の出版としてよい。この句は中七を「芝居たゞ行た」と読んで上へ続き、下へは「柴頂いた」と解してつづく、雑俳で云へば段々付で、中七がもぢりとなってゐる。全八丁半、この種の十七句を絵入で収載する。この書より先んじた出版と思はれるのに、

○大福徳寿楽歳玉　一冊

大福徳寿楽歳玉

がある。内題を示す一丁と、内容の四丁（欠あるか）とが同一のものか、若干疑問もあるが、そのままで紹介すれば、各丁二段にわかって和歌入りで諸芸諸職を集めたもの。女童之好模様（小袖をかけて女二人見る図に「霜かるゝよもぎがそまのかれまより雪気にたる冬のわかくさ」）・鯛鯉鮒（漁師の図に「のどかなる春のひかたのうらなみに鯛つる小船けふもいづらし」）・泉水築山（法体の隠居庭を見る図に「むらさきのにはの春風のどかにて花にかすめる雲のうへなか」）の如きを載せる。複製の出て有名な近藤清春の「とうけ百人一首」の如きものも上方でも出版されてゐる。所見は柱刻「百」とある一冊八丁のみで、百首そろったかどうかわからない。

地蔵天皇　はりすぎてなつきにへらしかねたへのころもぬぐとはあたまかくやま（地蔵が閻魔と朝比奈と車座でめくりかるたを打つ図、朝比奈は勝ち、地蔵は「ごくはうもしやくぢやうもついでにころもぬいではりかけるぞ」と云ふ負けざま）

垣本人集（ひとなか）　あしの葉のだるまだいしのいかだのりなか〳〵し木にひとりかいのる（達磨の曲芸）

小野小町　はなのさきはうづきにけりなみそすりに我みこにふるながめせしまに（天狗が鼻の先で味噌を摺る図。神官と小町が見てゐる）

誠に奇抜な手の込んだもぢりであり、狂歌である。これら詩句を加へる風は、長谷川光信画の「絵本御伽品鏡」（享保十五年刊）にも狂歌が入って、立派な風流絵本にも共通する。この軽文学の類は第一類の絵づくしに比して、一般庶民向であるが、笑話やもぢりは、現代でも漸く知識の進んだ児童の愛好する所で、児童用にもなったことは、勿論である。

**三、教訓絵本**　幼童児童の絵本であれば、なにがしかの教訓性をそなへるのが普通だが、ここでは、その教訓性の濃いものを分類しておく。

○絵本教訓草　三冊

北尾雪忱斎辰宣画、寛延二年か、大阪田原屋平兵衛刊。後に「絵本実語教」と改題。田原屋も絵本出版書肆の一である。「人不レ学無レ智、無智為二愚人一」と実語教の文を抄出、「おしゆればすなる鼠の文づかひ生れながらの愚人はあらじな」と道歌をそへ、葉売りが胎内図をひろげ売る前で鼠が文使の芸をしてゐる、小児好のする図を配する風。この教訓草の教訓性は明瞭だが、「絵本御伽帳」と題する一冊の如く、正月の風俗や開帳の体など描いて、雑駁な知識を説明として添へる、性格の曖昧なものもある。天明寛政の公私共に教育に熱心な時代が来て、教化主義が世を覆ふと、この絵本を、その目的で利用する。

○画本天加護孝行実録　一冊

天明六年刊で、同五年十二月褒賞された大阪天満の孝子の伝。（「播陽奇観」巻之三十八所収）

○養女孝行燈心家由来　一冊

○燈心屋娘孝行語　一冊

○六弟（むつまし）慮孝子実談　一冊

共に「播陽奇観」巻之四十に収まるが、寛政二年正月と同四月に褒美を賜った島之内の燈心屋の娘、天満の六人兄弟の孝行の実際を示して、世上の孝行を進める為の絵本。この後も、時折に出たことは、「播陽奇観」だけについても明らか。

**四、報道絵本**　世上の珍事を、この絵入の小冊子で報道することも行はれた。瓦版一枚刷の類よりは、詳細をつくせるのが取得であったらう。

○聞書伊勢墜（きくがきいせみやげ）　一冊

明和八年の伊勢お影参りの折のもの。（「奇観」巻之三十三所収）。

○世の中吉々栄（よいよいえい）　一冊

○御神徳富貴砂持　一冊

写本の「浪花見聞雑話」にも「寛政元酉の夏、玉造稲荷に砂持有事、誠前代未聞の珍事なり、むかしより諸方に砂持有といへど、此砂持に類する事なしと成、男女老若のへだてなく昼夜の分ちなくして、其人の出る事、誠妙々不思儀の賑なり」とただあきれてゐる、大阪玉造稲荷境内へ、東横堀久宝寺橋東詰浜、安堂寺橋浜から、日毎群集して砂をはこんだ出来事の絵入パンフレット。（「奇観」巻之四十所収）。

○絵本壬生狂言噺　一冊

これも寛政元年三月、勝曼院で京都の壬生狂言の上演があって大あたりをとった時の絵本。（「奇観」巻之四十）。その他「攝陽奇観」についただけでも、天明七年平野町神明宮での滑稽な造物の見世物を報じた、「造物噺の種」（「奇観」巻三十九所収）など、時折のものが収まる。この類は一概に児童用とは称せないやうである。

**五、江戸の草雙紙の影響をうけた類**　江戸では赤本転じて黒・青本の時代に入るが、明和、安永の期に際しては、次第に当世風俗を対象にして、やがて大人の読物たる黄表紙に転ずる。その期が又、それまでの専ら上方から江戸への方向をとった文化の流れが、逆流し始めた頃に相遇し、上方絵本に、黒・青本調、黄表紙調が滲透してくる。

○絵本唄合名家梅（カ）　一冊

は百人一首中の人物と、めくりかるたの札とが合戦をする、絵づくし類の一種であるが、絵風が既に芝居の絵づくし風で、それぞれに当代の人気俳優を配する。天智天皇（中村富十郎）・ほうしやうし入道さきの大しやう大しん（市川海老蔵）・あり原のなり平（嵐三五郎）しやか十（坂東岩五郎）・あさくろ大王は悪方の惣大将で、敵役の名人中村歌右衛門・きめんのきん五郎（浅尾為十郎）・あへのなかまろのかみなり（市川団十郎）と云った如くであって、末に「此絵のしかうを大字六くたりの上るり本に仕り御座候間□□御覧被下□□安永二巳正月板元大和屋弥兵衛」と記す。私はその浄瑠璃の現存することを聞かないが、この種演劇と絵草紙の接近の仕方は、黒本青本のそれと相似てゐる。未見であるが「風流化鳥軍談」（昭和三十二年二月沖森書店目録所見）もこの類かと想像出来る。

○増補絵空事　一冊

外題は不完全だが「絵本四季の絵空言」かと思はれる。序によってかかげたこの書名は入木による改題である。藤千山画作。天明五年乙巳春吉旦　京都書林御幸町通御池下ル町菱屋孫兵衛・一条通堀川西入町萬屋三右衛門合刻。「とつと前、四季の空言といふ天文うそ八百の数〻つけども、地獄ゑもはまらず、年老て又うそのつき残を自画して増補絵空事と題して幼稚の機嫌を取（下略）」と序して、四季の空言の続篇の如くに見えるが、実は天明四年刊の黄表紙「夜が昼星の世界」あたりの刺戟ではないかと想像してゐる。内容は四季、昼夜、風雨、天の川、天が紅、名月、霜雪な

増補絵空事

どの天象を、天上人のいとなみと見立てたもの。その見立が黄表紙風のとぼけた滑稽となってゐる。夕立の所を例にとらう。鬼が石臼で雪を挽いてゐる。女二人ついてゐる。一人の女が火打石を使ふのが稲光となる。一人の男が大きな刷毛で雲を黒く塗ってゐる。今一人が木桶の水をあけてゐる躰で、その文句、

六月土用のうちに雪をこしらへる、うすのおとが上てなるさかい、かみなりといふ。「あすはたつがてんじやうするやらうすの音がすさまじいが、雪があらいかしてぐわら〳〵ごろ〳〵いふ」「おつま、火うってたばこのましや」「おちよにいゝなされ、是からわしはへそのしたたきつけて、おちやわかさにやならぬ、是でいねにみがいる」、丹波太郎黒兵衛をこしらえる、「なぜにやらくわの木でおいだすという、いまぬつた所へ水かけな」「しぶずみぬらぬとおやだまがふみかぶりやる、雪のしたみをながせばあさでも夕だちという、どつとやろ」。

画は簡略で江戸風でないが、その書入の言葉の多いこと、やや気のきいてゐる点、全盛期に入った黄表紙の影響を考へざるを得ない。

○自慢噺　一冊

「播陽奇観」巻之三十九の所収で、やなぎ画。天明六年、日下泰山と称する面師の牢死の一件について刊した絵本である。新宗（真のもぢりか）の僧侶が、泰山作の面を使用して、死人に面会さすと人を寄せ、お十念やお立などと称して、不徳の富を得た、恐らくは当時の実話を、「ひつてんどうじ」の仕わざで、「南の元の来江」があばいたと大江山の伝説を世界にして絵本化してゐる。幼稚な手法であるが、当代の出来事を対象として、道化し、諷刺す

るのは、所謂「茶かし」の態度で又黄表紙に通じるものである。

○松竹梅天明八の木　一冊

所見本には欠くが、「攝陽奇観」巻之三十九所収には、天満天神の松・大融寺の竹・北野天神の梅と三本の角書をして、「七不思義天明八木（てんめいはちのき）」と題する包紙を合せて持ってゐる。天明八年に天満天神の松の枯木に青葉が生じ、北野大融寺の石塔の花筒の竹から若葉が出、南伝法の正蓮寺の松に鶴が巣を作ったことが世の噂となった。それらを合せて歌舞伎のお家騒動物風の筋を構成したのが本書。門松たてわき家で、主君の弟ながい竹三郎、それと馴染むけいせい八重梅、悪人ごぼうたん正などが主なる登場人物である。最後にさかいのふたばれんげ上人がこの騒動を丸く納めるのだが、これも堺の何処かで二葉蓮花の奇事があったのであらう。当時の流行歌「わたしや蛸の性ですいつくけれどお前海老の性で刎なんすノンノコサイ〳〵」をも、ぬけめなく利用する。この演劇のダイゼストの風を持ちながら当世をうがつ様は青本末期や黄表紙の一部の風体に一致する。

○すなもち鼻黒噺　一冊

寛政元年の前出玉造稲荷の砂持に趣向した一作。同じく「攝陽奇観」巻之四十所収。先に壬生狂言の流行で、世上陰気になったと嘆ずる大阪の稲荷神達が、玉造に参集して、人心を陽気に導かうと相談一決、砂持をはやらせる。これを迷信と笑ふ者には、末社の神が鼻を黒くぬる。砂持に出た女にいたづらする者は木のやうにしやきばる。そして「すなもちせぬものははなぐろじや、なべかまうつてもすなもちせい、せっきはいなりがのみこんだ」と云ふはやり言葉をばらまく。以上は当時の噂を伝へるのであらうが、以下砂持の途中で群衆に食物を売る者も高利をぼらない。又参加する者にも混雑にまぎれて「もちひとつぬすむやつがない」。貧乏の氏子が、砂持に出ようと鍋釜を売らうとすると、見倒屋が、かへって四百文をめぐむ。いよいよ節季になれば、平素とあべこべの取引が行はれると云ふやうなことをつづる。これは明らかに山東京伝の「孔子縞干時藍染」（寛政元年刊）で、道行はれて、無欲やほどこしの流行する趣向を、道徳と信仰を取りかへて利用したものである。絵と説明文、書入の配置も黄表紙に似て来てゐるが、手腕はとても京伝に及ばないのは、先づ当然である。

○多鳥目山富寿玄初春（だてうもくやまふすいのはつはる）　二冊

○初春三福話　一冊

は各、「攝陽奇観」巻之四十・同四十四に所収で、前者は評判の見世物駝鳥に十二支をからませ、後者は流行の撫牛を趣向にかった、やはり黄表紙系のものであるが、詳細は省略。以上の江戸草雙紙の上方絵本への影響は、他の文学様式に於ける現象と合せて文学史上の注目すべき課題であるが、これを細説する場所でない。ただ、極めて明瞭な意識と行動において黄表紙など、江戸の新文芸の風躰を上方に移さんとした人物に、鷺見屋淇楽、春光園花丸らの人々があったことを述べておく。二人は寛政六年、従来遊里や遊び、粋道を述べても半紙本であった京阪の作品中では珍しく、装釘も小本で、作柄も江戸風の洒落本、「北華通情」、「言葉の玉」・「粋の筋書」の三書を出した。一方中本即ち黄表紙風の絵本をも計画した。

○廓回粋通鑑（しまめぐりすいつうがん）　中本一冊

鷺見屋淇楽作、春光園花丸序。寛政六年刊。大阪堂島桜橋春曙館

蔵版。既に稀書複製会第七期所収で、世に知られてゐる。上部三分の一に説明を、下部三分の二に絵を配して、粋と遊びの諸相を島に見立てたもの。末に「あかほんのしまひにゆめのさめたるはひさしいものなれと、（下略）」と記す。ここの赤本とは、京伝や三馬らもそんな用ひ方をしてゐるが黄表紙をも含めて、草双紙一般を指し、これはすっかり黄表紙気どりの証となる言葉である。

○通話八卦　一冊

三符畳作、春光園花丸序、寛政六年、刊序によれば大阪文器堂板。三符畳は流芳堂なる書林なることも作中で判明する。この書外題に「絵本有所充満物」とあるが、はたして原題簽か不明で、かかげた書名は序文の中から得た所である。前書と同筆の板下で中本十四丁、中十二丁は、画組に文章、書入の配置、全く黄表紙の体を取る。のみならず見返しに、喜三二の「天道大福帳」・京伝の「江戸春一夜千両」・好町の「鳩八幡豆兼徳利」など五部の天明六年刊の黄表紙の名をかかげる。花丸には寛政十一年に「画本異国一覧」なる異国案内体のおどけた作品があって、勢州白子の人、幸人のその跋に「文は京伝花丸二子が詞の花を咲し」と見え、この「通話八卦」中にも、「おりやァ江戸へいったとき山東亭と京伝ぶんになつてかへつたからしやれ本でもつくつて見よやふかといふやふなもんだ」と述べて、関係者は自他共に京伝の亜流を以て任じた、黄表紙洒落本にかぶれた連中なのであった。作者の夢中に、当時有名な座頭の占者おんじやり兵衛の所を訪ひ、未来見通しの鏡で、十五年から五十年位の後を見ることとなる。例の模倣作を多く出した朋誠堂喜三二の「長生見度記」（天明三年刊）の趣向

通　話　八　卦

にならったもの。十五年程後の頃となれば、上方も江戸風にすっかり変じた繁華街、出合宿、そばや、諸芸の稽古場、諸商人、参詣で賑ふ社寺などさまざまを写す。そして夢さめれば上方のやぼな風を見ると云ふ筋。江戸言葉を用ひて、江戸風を紹介するのが主目的である。洒落本と云ひ、これらの絵本と云ひ、皆江戸の新風躰を模した彼らの新しい試みであったことは、

さてこれまでは新物が出ても、いつくわん買人があると、それにつてをもとめてかりてみる事、此とちのならひにて有し、それ故、書林などおのづとめづらしきものも出さず、国中にしやれ本などといふことは、夢にもしりし人はなかりしに、かの夢〻合のこれやはじめなるらん、当年より江戸気うつりて、人にかりてみるなどときたなびれたことはなく、はてやすひもんだ、買てみたがエエ、かるほどなら見ずにいたがエエなどとて、我も〳〵と御もとめゆへ、しぜんと諸あきないけいきよく、かくべつ新しやれ本大ひやうばんにて、名にたちばなやが大仕合、とあるにて明らかである。ここに云ふ洒落本の称には、当面の黄表紙風の絵本も勿論含まれてゐる。がこの試みは失敗であったらしい。先に上げた寛政十一年晩秋刊の花丸の「絵本異国一覧」は半紙本五冊になってゐるのは、江戸風を中止したことで、この種の作品は、僅少であったと見てよからう。この人々の伝記や江戸の新文学様式が、上方に逆流し始めた頃の上方文壇の実情など、歴史的に興味があるが、今は当面のことに筆を限る。この絵本の第六類として数ふべきが童話の類となる。以上の類にも児童向の要素がそれ〳〵前述した如くあったが、主に児童向の「話」に目的をおいたものを選ぶ。

## 三

先づ私の知り得たものの目録をかかげる。

○絵本猿島六本杉　一冊（七丁半）

作中寛保元年豊竹座上演の浄瑠璃「田村麿鈴鹿合戦」のことが見える。寛保元年に近い頃の刊。

○新話茶薄山蓑気遊来（ちやうすやまひきのゆらい）　一冊（七丁）

寺沢氏画、大阪大和や弥兵衛刊。明和四年上総国千田村称念寺の如来が、三月三日より堀江あみだ池で開帳され、同寺の什物ぶんぶく茶釜を持ってくるとの前評判であったが、実際は来なかった一件があった（大田南畝旧蔵写本随筆「談笈」）。或はさうした折のあてこみと見れば明和四年頃の刊。ただし確かではない。

○伊賀栗乗掛語噺（いかくりのかけはなし）　一冊（六丁半）

大坂嶋之内太左ヱ門はし八まんすじ立花屋□□□刊。「伊賀越乗掛合羽」の歌舞伎は安永五年初上演、浄瑠璃は安永六年の上演（義太夫年表）なので、その頃の刊であらう。

○倭人（につぽんじん）の夢合（ゆめあはせ）と画本大津（えほんおおつ）の御馬（ぐんま）　一冊（十丁）

唐人（とうじん）の寝言（ねごと）

作者陰山五足斎・画工富尾篤平、彫刻山本勢右ヱ門、安永十（天明元）年丑正月、浪花百家堂合梓。

○通俗栗太郎軍記　一冊（七丁半）

○桃栗三代記　一冊（七丁半）

○風俗雀実記　一冊（七丁半）

○絵本竜門の滝　二冊（上八丁下七丁）

○千山画

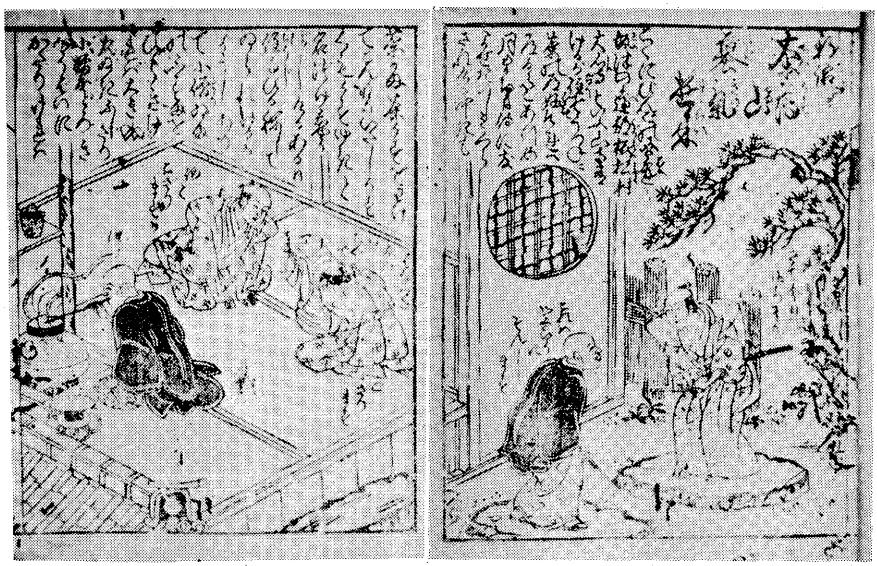
○絵本浦嶋太良海中軍記　一冊（五丁半）
大坂じゆんけい町せんだんの木筋北江ゆくたちはな市郎兵衛版。
○画本橋本菖蒲論　一冊（五丁半）
雪圭斎画。
○猿の尻は真赤　一冊
中本八丁の写本で見たのであるが、内容はやはり童話で、絵本の詞章のみを写したか、又は後述する如く、やや知識ある人が、絵本童話風に述作したかのいづれかで、この類に加ふべきものと思ふ。以上七部は刊年又は成立年次は明らかでない。これらの外に、
○千歳鱶一睡　一冊
京都大学附属図書館にはこの外題の絵本を蔵するが、内容とは一致しない。この外題に合ふ内容のものは、勿論出刊されて、童話の一であらう。
○七福神五色名玉　一冊
昭和三十三年十一月大阪中尾書店目録所収。
○絵本かくれがさ　一冊
昭和三十一年一月上野沖森書店目録所収。の如きも、この種の童話でないかと想像する。今は所見の十一部について検討、その概要をうかがって見る。

四

江戸の赤本より時代も遅く、又は早期のものを見出し得ない為もあらうが、所見のものには昔からの童話をそのままに絵入にしたものがない。種々の童話を合せたり、作者の新工夫を加味したり、様々である。
第一類として、昔からの童話の生々しいものを一つにして見る。
「絵本竜門の滝」の筋は次の如くである。竜宮の乙姫が竜門へ御興入の行列へ、片思ひの鮑が、貝類や磯魚達をかたらって、之をうばはうと途中をさへぎる。前駆したしやちの助の働きで事なきを得る。ここの絵や書入の言葉が滑稽である。石かれひ「おやさへにらみしわれら、いはふていしをうちかけうばいとり、いしがれの名をあげん、きづ貝あるな」ばい「まがつたしりはおれがもつぞ」など。それから嫁入の荷物やら竜門での受渡しの挨拶など鼠の嫁入流の絵づくしである。人足にあたる鮭と鰐が酒にたべ酔うて、「いかにも鮭にゑい」「鰐ふくたべようた、これもおめれ鯛じや」など、ここにもおかしい書入や、医家と同音なので烏賊が御典薬、蛸入道の仲人役などおもしろい見立がある。乙姫が竜門の滝を見物する所では、侍女が「乙姫様ごらん遊ばせむこ様の御しゆつせの竜もんでござります」とか「こいぞつもりてふちとなるじやの」など会話がある。一方御鯛官所では、鮑などは真珠やふくだめを献上し、昆布がとりなしで、わびを入れたので、狼藉を許す。ここの代官所でも、「かまぼこまるやけにあいとどけに出る」「ぶり舎利堂じゆふくのねがひ」など、おかしみを加へてゐる。この画者千山は、前出の増補絵空事をも画作してゐる、この作も同人かも知れない。黄表紙風の気のきいた滑稽は共通する。上巻にあたる部分は以上滑稽な絵づくしであるが、下巻相当の所が童話となる。乙姫がその中に病気にかかり、竜門の人々心配、竜宮城でも「魚官ぎぎと浪居」る中で、舟玉明神の神主おおみのかめ（近江守のもぢり）が占ふ。竜宮王も洒落

たもので「ただむかつくといふゆへ、ひでさとをたづぬれどもゆくえしれず、あんずる」などとある。とど魚海胎で姙娠とわかり産科の香川太刀魚が出て、「水中なれば灸治はなるまじくそんずる。猿猴録を見申に海胎の魚中方には月のゑんをもつて、猿の生胆をもちゆるがよしとまふしてござる、お手に入べきや魚思案なされませ」と進言する。これからは例の「猿の生肝」（以下童話のよび名は主に日本放送出版協会編「日本昔話名彙」による）の話となって、石亀が猿をあざむいて竜宮につれてくるが、水母が猿に知らせてやったので、胆を洗濯して、木にほしてあるとてまんまと脱出する。猿に嘲弄されて、石亀がじだんだ踏む。竜宮では水母は骨をぬかれ、水母の子の海老は腰を折ってわびる。大騒動も乙姫の安産でけりがつく。とりあげ婆が児安貝、おつきの乳母がいねぶりのふか、海馬夫婦が祝に出ると、どこまでも洒落てゐる。洒落の所をのぞけば、嫁入の絵づくしに「猿の生肝」をそのまま加へたものである。ここの「生肝」の筋は、島津久基氏の「日本国民童話十二講」にも上げてゐられるが、滝沢馬琴の「燕石雑誌」所収のものと似てゐる。当時一般に行はれてゐた姿であらう。

「茶薄山蟇気遊来」は、備後の国逢坂津の辺郡板松（ばんしょう）村大心寺の住僧は茶の湯が大好で、うすくも、うすゆきと銘した茶釜・茶臼を愛用してゐた。或時その住僧の寝姿を小僧が見ると、大狸であって大騒ぎとなり、その後、その僧の行方は不明となる。後住が入って三年、茶臼・茶釜も、つけ物桶の重しなどに使はれて、珍重されない。ある夜この二器が台所で述懐して、淋しくなった今、怪異をして人々を驚かさうと、夜毎に大きな火が飛び、さま



茶薄山蟇気遊来

〳〵の化物はびこり、次第に住む人なく明寺となった。この怪を面白く描いてゐる。しかるにここから三町ばかり山下に那須与一兵衛と云ふ猟好きの浪人があり、百姓にも頼まれ、この怪異を見とどけ退治せんとする。登山すると噂の通り、

茶がままつさきすすみ出、ぶんふく茶がまにけがはへた〳〵、

ころ〳〵茶うすに手がはへた〳〵

と躍り出るを合図に、隅々の茶道具が暴れる。この茶釜を打つこと第一と与一兵衛、家に伝はるひきめの鏑矢を大弓に張りつめて打つと誤たず手ごたへした。人々これを見ると大狸で、山に埋める。

たれいふとなく茶うす山と名付、ひきめの矢にてほろぼしたる故、茶うす山ひき木のゆらいといひなせる、ことの葉も根もなきを、寺沢氏がぐはに、大弥が口のまはらぬをむりにまはす、茶うすのはなし、いとさまぼん様のわらひのたねにもと、桜木にうへながむる物か、あなかしこ〳〵

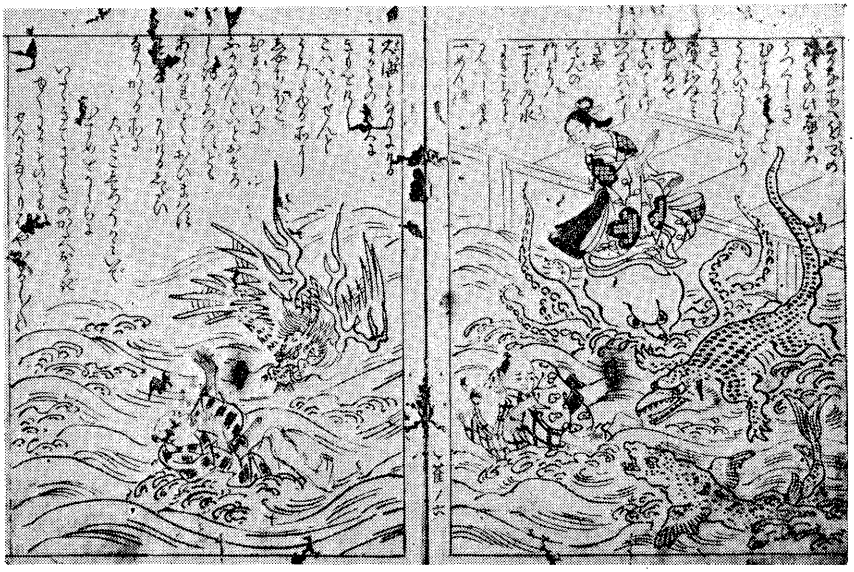
で終る。お伽草子に見える「つくも神」の系統を引く化物づくしを「文福茶釜」にからませたもの。備後の大心寺なる寺や、そこにも茶釜の説話が伝ってゐたのか聞く所がないが、全くの作物かはまだ明らかでない。いづれにせよ、「文福茶釜」の話は生々しいのでこの第一類に入れた。

第二類は、原話は伝承の童話であるが、時代の嗜好や作者の傾向に応じて、改補された要素の濃いものを数へる

「通俗栗太郎軍記」は、初丁の表に講釈師が見台により、張扇をたたいて、小児達に、以下の話を講ずる躰を画き、

むかし〳〵ちいとばばとあつたげにござりまして、ばばが川へせんだくにまいつてござれば、大きな栗が三つまでながれてきたを、ひろひかへりてみれば、其くりがむく〳〵とうごきだして、くりむいたやうなたくましゐおとこの子が三人までとびいでしかば

と、当時の講釈師の口調を、若干つたへる文章で始まる。三つ栗をかたどった三人は生長して栗太郎・栗次郎・栗三郎、共に大力の若者になる。山のあなた、宝の数多ある「さるのいわや」へおしよせんと相談一決、爺婆は「むかしのためしにならって日本一のきびだんご」を作ってくれる。勇む三人の前にしまむらかに蔵・引石うす右ヱ門その他が味方に参じ、要塞堅固な城門も栗太郎が押し破り、六尺余りの大斧を持つさると五尺八寸の大太刀でわたり合ひ、負けた猿は民俗的風習の如く「ながく御馬やをしゆごしまうさん」とて降参する。宝物を献上し、二人の娘を蟹蔵と臼右ヱ門にめ合さうと申し出る。宝の中には、金襴緞子の心のままに出る袋、金銀珠玉の出る玉手箱もある。これらを帝に献上して一国の主となった。主な筋は「桃太郎」説話にあるは勿論。その桃太郎の説話も、「日本昔話名彙」や「日本昔話集成」によれば、桃を栗に変へた例が青森県にあり、爪子姫説話も、栗姫とする例もあると云ふ。元気のよい子のことを栗虫と云ふことは「倭訓栞」にもあり、頭原退蔵先生の「川柳雑俳用語考」には、古い俳書からの用語例もある。栗のやうなと云ふ形容も、今日の新聞漫画までつづく。桃が栗に変じるのは自然で、あながち創作とも云へないかも知れぬ。前半に「猿蟹合戦」の二勇士が、「桃太郎」の三軍士に替り、鬼が島が猿の岩屋になる。「桃太郎」と「猿蟹合戦」の混乱が残るものとして、「名彙」は東京都の北多摩郡、愛媛県北宇和郡の例を引く。この絵本と同じ頃の上田秋成の遺稿



風俗雀実記

「楠公雨夜がたり」（一名猿嶋の敵討、拙著春雨物語解題参照）には、

（前略）親の腹から子がはひ出て、いつのまにやら成人して、親のかたきうちに出る、道にて蟹殿〳〵どこへいかしやる、おこしの物は何じや、日本一の黍団子じや、一つくだされお供申そが、段々大勢になって、かたきの内へしのびこんで、雪隠やら寝所やら庭やらにかがんでいて、逃る所をはさみやら小刀やらして、首をとうと切たげな

と、別の型で混乱がある。伝承によったか創作なのか何とも云へないが、玉手箱や、金襴の出る袋は、各々「浦島太郎」と「舌切雀」から埒し来ったに相違ない。ともかく童話の、当時の言葉で云へば、吹寄が、当時の社会向の若干の合理化と共に行はれてゐることは事実である。現代の如く諸国に民話の蒐集家があって、集合した伝承を一本にすることは考へられない当時、これにはやはり幾分かの創作性を考へなければなるまい。そして、この様なものが、この頃中央で一度印刷されてゐることも民話の歴史の研究には、一考の材になりはしないだらうか。「栗太郎軍記」は、なほ伝承の集合と解してもよいが、次の「桃栗三代記」は創作性が濃厚な桃太郎説話の転化である。

「桃栗三代記」の筋は「名に高きやの都にちかき高はらとかやいふ所」（大阪の高原）に住む山伏清応坊（西王母のもぢり）の家にある大きな桃の木を、仙人作兵衛（足とぼ〳〵の老人でとぼ作と呼ばれる。東方朔のもぢり）なる老人が三つまで取った。その一つの桃が男子となり二つを抱いて、我は天からさづける汝の子だと云ふ。桃太郎と名づけて育てて十六才。その時神のつげによって、年徳神の家の重宝三宝珠を「昔そみんに亡されたるこたんが

よるい神荼鬱壘二人の悪鬼」がうばったので、討手にむかふと云ふ。従者はいりまめ八郎、ひら木の左ヱ門、あかいわしの金太郎、なみざけ九郎、あらむぎ四郎で主従六人、作り山伏となって行く。東海の端に出た所、わたつみの神が、宝の船に乗せて大陸を渡してくれる。さて陸地の険阻にかかり、谷川に入ると、水汲むかづき姿の女に逢ひ、その案内で、鬼の岩屋に入る。その女は城主の娘はんにや姫で、門番のとがめも無事に城内に入る。山伏達は芸づくしで鬼の心をとる。はんにや姫が桃太郎に思ひを寄せるにたよって、宝を求める。姫が心中に切った小指の血がとばしって、石にかかると、水気立って、その下に三宝珠のある事を知る。取出す珠の光で姫は悶絶する。ここで鬼を相手に六人の大活躍、八将神出て味方する。歳徳神も現れ、此度の桃太郎の働きで、後々も桃のお札を門口にはれば、邪神のたたりはあるまいと云ふ。又三千世界の東北に門を建て、鬼神の出入を改め、ここを鬼門と呼び、そのほとり三万里に桃の木を植ゑよなどとも云ふ。桃太郎は八将神に宝を奉り、隠笠・打出の槌を父のとぼ作に与へる。とぼ作は清応坊とも中よくなり、「是より南にあんじつをしつらひ、東方あんとなづけんと、今よりさかゆる仙人のより合ふいわれ、せいをうがかかるきどくの桃の木の徳なりと、木とく斎とかい名し、のきをつらねて仙人のおや玉とこそなられける。げにつきせめやことぶきのながき日かげも、よふようたる春の野もせにいろふかき桃のいわれをかきよせて、猶ことの葉はしん〳〵たる新板をこそ奉る」。この文章でもわかる如く、小児が自ら読むとしてはやや生硬な文で、趣向も亦複雑である。しかし前出と同様の絵本で、児童用なることは、所見本に幼い手で「伊丹屋富」としたのが、この持主だったのである。東方朔・西王母・桃太郎、その他桃に関する諸伝説、大江山や節分の用品の擬人化と鬼に関する諸昔話を吹寄、芝居の手法や昔話さながらの進行やの方法も混用してゐる。一つのテーマ題材をめぐって、それに関する諸の素材を集め、一編に構成する方法を吹寄又は「まぜこぜ」と称して、実はこの頃小説界の流行であった。浮世草子の末流にも黄表紙にも、東西共に認められる。現に宝暦三年に江戸の神田今川橋元乗物町小沢伊兵衛板の半紙本五冊の読本「桃太郎物語」は、又吹寄であった。梗概は水谷不倒氏の「選択古書解題」にゆづって省略する。この書に鬼の秘蔵する飛竜の巻物を見る為に、鬼の娘十郎姫の聟になる一件があって、かすかながら似てゐる。桃太郎物語の序には「此ころ書林それがし虫ばみたる草紙をふところにし来りて」それによって作ったとある。これを真実とすれば、二書に共通の原拠を考へられるかも知れない。ともかく多少の知識人で不馴な人が、当世風な作法で作ったものであらう。「昔話名彙」によれば、高知県に「桃栗小太郎」と云ふ桃太郎系説話があるが、「三代記」なるこの書の名は内容に相応しない。柱は「桃太郎」とある。或は改題かも知れない。

「風俗雀実記」は、「栗太郎軍記」と同じ画者の手になる。爺の助けて来た雀がのりを食って舌を切られるのは、「舌切雀」の定跡通り。爺は「したきりすずめとのこらにござらぬかチョイ〳〵」と呼び歩き、舞を見せて、子供達から、山のあなたに布を織る女が雀だと聞く。たづねあてた女は、爺の恩によって人間に生を得たことを謝し、つづらを与へる。持ち帰ったつづらの中には竹の筒一つ有って、そこから金銀銭がばらばらと出る。慾深い婆のもら

って来たのからは、狼や大入道が出る。爺の詫びによって、怪はかきけす如くゐなくなり、婆は善心に立帰る。さて問題は竹の筒で、盗賊が入ると、筒から悪魔降伏の神が出現して追放ふ。子供のないのを歎ずると、筒の中から玉をみがいたやうな娘が出る。その喜びの村中の宴には、竹林の七賢人が出たり、七賢人が踊子になって興をそへる。近郷の若者が娘をうばひに来ると、筒から水湧いて大海となり、悪魚出て、大蛸が娘を頭にのせてゆく画は子供の如何にも嬉しがる構図である。遂に事叡聞に達して、娘は后となり、爺は大納言となり老を楽しむ。「正じきにしてじひふかきゆへであったといのふむかしまつかふ」。前書と相違して誠に童話的な進め方である。しかしここでも「舌切雀」の中に「竹取爺」や「打出の小槌」の話を混じてゐる。

「猿の尻は真赤」は同傾向ながら、手が込んでゐて、佳作である。一人の美しい娘を持った百姓が片山里にゐた。系図正しい武士だが、主人を諫めて浪々の身の上。田圃に出て疲れ、誰でもよい手伝ってくれたなら、娘を嫁にやらうと独言した。大猿が現れて助けたが、後日、家を訪ねたこの猿が娘をくれと云ふ。獣にはやれぬと聞いて大いに怒り、父の命をうばはん勢なので、娘は申分を聞入れるから、父を助けてくれと云ふ。猿は娘をつれて山の畑道を行くに、猿を谷川につき落す。猿は浮きつ沈みつしながら「そなたをお猿後家じやとわらわん事のかなしき」と泣いて見えずなった。以上は全国にも広く伝播する「猿聟入」の昔話である。さて娘は知らぬ山路を通って、雨夜に一軒のあばら屋にたどりつく。主人は同情して泊めるが、こはい事があっても声を出すなと注意する。その夜ふけて、様々の獣類がこの家をとり巻き、「人くさい〳〵」とほえる。折節、雨が漏って来たので、主人が「とらおおかめよりもるぞおそろしや」と云ふと、「もる」とは如何に恐しいものかと、獣類は逃げ去る。「人くさい〳〵」と云ふのは「猿神退治」にも見える文句だが、全体は云ふまでもなく「古家の漏り」の説話である。漸く夜明けて、主人は、娘の孝心にめんじてよい事を教へよう、東の方にいがくり庄司と云ふ長者がある。そこへ行って宮仕へせよとて姿を消した。大きな構のその長者の家で、顔にすみを塗り、風呂の火焚として奉公する。鎮守稲荷明神の祭に、娘はその日だけ美しく化粧して参詣したのを、長者の一子いが之亟にみそめられて、人知れず契った。両親の知って忠言すれど聞かず、やがて素姓もわかり、立派な嫁となる。風呂場に奉公するくだりなどはお伽草子の「鉢かづき」によったこと思へる。祭でみそめられるのは「糖福米福」の継母説話に似る。これらを合せたのであらう。しかる所に前の猿は生きてゐて、今は桃園と名のるこの女が庭の草木を眺める時に、しのんでいた猿猴が大木の木末から長い手を出してうばひ取る。みねをわたり谷をかけって奥山の猿が岩屋のその猿にわたした。いがの亟大いに急ぎ取り返へさんと山へ入る。一つの洞窟に娘を据えて、猿さめ〳〵とくどく。この辺「猿の経立」によったのであらう。追手と眷属の猿との争ひになる。いが之亟、平常信じる青面金剛を念じると、金剛童子が出現して、大将猿をおさへ、人間を犯すことの罪深きを説くと、善心にかへり恐れ入る。金剛童子はかって娘を助けたあばら家の主人で、実は猿田彦大神なりと述べて、

わざわいのおこる事三ツをつつしまざるゆへなり、第一むすめが親いらざることをつぶやきしよりことおこり、第二いらざる

事をちくるいの耳に聞てむほんおこせり、第三い賀之亟はぶしの身としていらざるいろを目にみるゆへなり、すべての人目に見、みみにきき、口にいいてより、わざわいはおこるなり、よく〳〵此三ツをつつしむべし、此猿はいまよりして我召仕となすべし、人々のいましめにみざるいわざるきかざるの姿をまつせにのこし給ふ、さて壱つやのあとをやしろとなし、さいはいをおしへ給ふゆへ、幸神（さいのかみ）とも道おしへ給ふゆへ道祖神ともまつるべし、幸はかうしんなり、金剛童子あまくだり給ふは庚申の日なるゆへに、今さいわいをいのるに、かうしんまちをすることは、此いわれであったといのう、むかしまつかう猿のおいどはまつかい。

と猿に関して教訓的で庚申信仰の由来としてのしめくくりを附してゐる。この辺に作者の教養がうかがへるやうである。

第三類は芝居の影響の濃いものを分類する。絵尽しを摸した絵本もあるが、これは読物性に乏しい。黒・青本の影響で芝居と関係を持つものがあるが、これには童話的要素がない。ここでは児童向の読物で芝居と関係あるものを選んだ。

「伊賀栗乗掛語噺」は、歌舞伎・浄瑠璃で上方一般の人気をうばった「伊賀越乗掛合羽」を、果物の世界に移し、児童読み物としたので、芝居の絵尽風の画ながら、頭に木の実をのせてゐるのは、子めいて面白い。主な人物を、浄瑠璃と比較すれば次の如し。

和田　静　馬（綿の木ゆきへ一子しづま）
沢　井　勝五郎（ごしよがき又五郎）
佐々木丹右ヱ門（ささの竹右ヱ門）
沢　井　城五郎（ごしよ柿城五郎）
唐木　政右ヱ門（くりの木政右ヱ門）
桜　田　林ヱ門（桜田林五右ヱ門）

伊賀栗乗掛語噺

木の実にしたおかしさはともなふが、大体同じ筋なので、詳には云はない。

「絵本浦島太郎海中軍記」も、黒・青本調と見れば見えるが、童話利用の児童向としてこの分類に加へた。浦島太郎が竜宮城で、乙姫と祝言整ったのを、法螺貝が法界悋気で謀反を思ひ立つ。一味を集めると、川ずまひの川太郎、近江の源五郎、だんぎ坊遊水など。太郎方も逆よせせんと出でたつ。どうしたことか子供達に人気のある兎がここに参加し、杵で敵の大門を打破り、海魚類がこみ入って謀反方を討つ。鯉などの河魚も味方と見せたのは計略で、いざの時は太郎に味方、法螺貝はいけどりとなる。「いくさにかつをのたちうをくらゑ」「うぬがからだのはまちをしらぬ

か」など書入があって、幼童向のたわいないものである。

第四類には、童謡によって構成した童話を一群に見た。この頃、同じ傾向で有名なのは清涼井蘇来の「童唄古実今物語」（宝暦十一年、東都書肆松屋庄吉・竹川藤兵衛刊、文化元年上総屋忠助の後刷もある。）と「後篇古実今物語」（明和二年東都喜多久四郎・竹川藤兵衛刊）の二書。前者は水谷不倒氏の「草双紙と読本の研究」に解説がある。ゆづって省略する。後篇は、

京から雁が三ツくだる、先なる雁に物とへば、おいらはしらぬとつゐ通る、中なる雁に物とへば、おいらもしらぬとつゐ通る、跡なる雁に物とへば、おいらはちっとものしりで、あの山崩して堂建て、堂のまはりに芥子蒔て、芥子のまはりに菊まいて、今朝のさむさに何花を、仏にしんぜる菊の花、一本折てはお手に持、二本折ては腰にさし、三本折まに日が暮て、おぢ御の長者に泊ろふか、おぢ御の長者に鬼が居る、おば御の長者に泊ろふか、おば御の長者に牛が居る、姉御の長者に泊ふぞ、朝起て空を見れば、七ツ小女郎が機を織、機をるが面白ないとて、鳥川へ身を投て、身はしづむ、髪は浮くそこで殿御の御心と云ふ可憐な手鞠唄を、十二段草紙で有名な浄瑠璃姫説話に加へた、誠に愛すべき中篇の佳作をなしてゐる。がこの二書は内容にふさはしい子供らしい絵入でこそあれ絵本でないし、児童向とも一概に見られない。各六冊五冊の中篇でもある。江戸のさうしたものの刺戟か如何かは明らかに出来ないが、次の二書は、この類に入る。

「画本大津の御馬」は、傍題に「川さこ〳〵一しやうどんぶりかさおてふ笠日かさ三笠山の由来」「つちの子はやり持よふ鐺もつたばんにだいてねて銭三文やり咄し」とある。前出に「茶薄山蟇気遊来」があったが、江戸の青本、黒本にも「――由来」、「――のはじまり」と云ふ書名が散見し、黄表紙になっても、これよりど

画本大津の御馬

うなったとか、これが何のおこりだとか云って、戯れるのが常套になってゐる。東西を通じて、子供の読物の一つの型であったのである。ここでは三笠山の由来として、童唄から説き起すのである。文中に童謡の詞章の一部分を所々に出して印をつけてあるのを集合すると、一つの童謡がわかる。

○川さご〳〵一生どんふりかさ、おてうかさ、日がさ、夜にふく風が大津へきこへて、大津のお馬おどろきいなゝく、つちの子はやりもち、よふやりもつた、ばんにだいてねて、みそすつてねぶらそ、それがいやなら銭三文やろぞ、一文であめしよ、二文で女郎、女郎はたれじや、たゝみやのおまん、お万には子がある、子があろとまゝよ、まゝはゝにかけて、まひとかひり。

淡路島で生れた私には、「かさご〳〵」の語はなつかしい語である。大人が子供をかかへて左右に揺りながら「かーさご〳〵」で始り、何とかの風が吹けば、どことかへ「飛んでゆけ」と云って、ホイと地に落したやうなことを記憶する。よって知人に依頼して、古老に正した所、次の唄を得た。

○かわさごかわさご。屋根ふく風は、大津へきこえ、大津はお馬、つちの子はやりもち、ようやり持った、お姫さんの籠と天神川さんの籠と、くらべて見れば、どちらが深い、深い川へはめよか、浅い川へはめよか、深い川へ、スッポンポン

比較して同系のことは、一目瞭然。そして淡路の伝承の方が古形のやうである。さてこの書の唄は「まひとかひり」とあるからすれば、鞠つき唄ででもあったらうか。

さて話の筋は、昔唐から「かさ」と云ふ宝物三がい日本へ渡来し、大阪の川浪佐五兵衛と云ふものこの三品をゆづりうけて、長者となった。この男げはう頭で、女童まで川佐五川佐五と呼んだ。一人も子供のないを嘆いて、清水の観音に日参する。満願の日童子が夢中にあらはれて、慈悲善根をつむべし。さうすれば三人の子がさづかるだらう。汝の家宝三がいの笠を各に与へよ。惣領の男子は汝の子でないから、傘一本そへてこの舞台から捨てるがよいと、おつげがあった。長男つちの子は十才の時、おつげの通りにする。「今の代にもぶたいより、かさをひろげてとぶるんゑんとしられたり」。舞台の下は「大江のきしつゞきゆへ、ぬまのふけ田へどんぶりはまりけるより、たから物をどんぶりがさと名づけ、唐より来たるなれば、是からかさのはじめとかや」とあって、ふけ田から上ったつちの子は、あてどもなくさまよひ出た。二番目の娘おてうは十五才の時、笠を一つ与へて嫁入させんと考へる。「此かさをおてうがさと名付、ぬりがさすげ笠竹のこがさ、あみがさのるい、これをはしめとす」。三男は家督と定め、名は日五郎。これに与へる笠は「日がさと名づけ、青おあか地、そうたい日がさのはじめなり」。しかるに娘おてうが笠もろ共に行方不明となり、母親その為に狂気となって迷ひ出て三年。大津の駅で、槍持になってゐるつちの子に合ひ、おてうが女郎に売られて大津に来たが、たたみやに受出されて、笠を売弘め、今は長者になゝ、子もあることもわかる。本心に立帰った母親と、共に大阪へ行き、親子全部の会合をよろこんだ、佐五兵衛の住所をかしらの長いにちなんで長町と称し、「三つのたからはのちの代のしるしとて、ならのみやこへさしのぼし、三かさ山といゝつたへけり」。阿倍仲麻呂も、唐土で三笠山の詠を残したが、その時唐人は、「指干唐笠人爾無借唐笠」と教へたと云ふ。以上余裕のない丁数の中で長い歌をこなした為、窮屈

にしてまとまりのない筋に終ってゐるが。流石作者や画者を示しただけに、書物の体裁は小冊子ながら、整ってゐる。

「画本橋本菖蒲論」も、

木ぐいかゝし九ねんぼはしの下のしやうぶは、かれ共かられぬ、たいどの〳〵田井のむすめかぢはら、みそちつくり、さけちつくりで、みいれものいたる

との童謡を、「いとさまがたのそへちのたすけにもなりなんとするは、まことにめでたきみよにすめるしるしか、さくらきにほりおこしたる新板は雪圭斎の筆作に（下略）」て出したもの。話の筋は前書同様確かでない。田井の太夫かねとしは梶原姫と云ふ美しい姫を持ってゐる。婿選びをするが、門前の橋の下に異形のものあって婿を取り殺す。橋の下に菖蒲がある故に異形のものも住むと、これを刈り取らうとしたが、苅り切れなく、苅り手をも喰ふ。力量ある婿がねを選んだが又引きさかれ、思案にくれて、門前に高札を打って、「此はしの下のしやうふをかりとるものあらは、此やしきのむこたるべし」と世に示した。梅が井千鳥之助は婿にならんと希望し、人力では不可能と千手観音に祈願、三七日につげあって、異形のものは九ねんほうと云ふ。姫に懸想したが、姫は摩利支天の神符を持つ故近づけず、婿をとり殺すのだ。これを退治する為には、橋詰より六十間西南に柴を焚き、「みそをつくりさけをつくりとひたともかければ」、その匂ひにひかれて九年ほうは火のもとにしたひよる。このもの身内はくろがねの如く堅いが、わたはみつとりのもちの如く柔かである。木竹のひつそげを、その通り途にまいておけば、これがたって苦しみ、姫のことも忘れ、味噌酒の香にむせ、火中に入って死すぞとのおつげの如くして、千鳥之助はめでたく婿となった筋。この歌謡は、狂言の「祢宜山伏」（大蔵流では梟山伏）に

橋の下の菖蒲は、誰が植えた菖蒲ぞ、折れど折られず、刈れども刈られず

とあり、林羅山の徒然草の註「野槌」三に

橋の下の菖蒲折れども折られず、苅れども苅られず、伊東殿か土肥がむすめ、梶原源八、介殿のけ太郎殿

として上げて、これは源範頼の用にたたぬと、時の大名の格柄あるを云ったものだと説明した。それをうけた「栗里先生雑著」十三、「俚歌童謡の変遷」では、同説を上げて「語意難渋甚ださとり難し」とした。その間にも、この歌そのものは変化して、童謡集（「近世文芸叢書」巻十一所収）には、鬼わたしの一、「草履まきに二つ残りたるとき勝負わけのうた」として、

草履きんじよ〳〵〳〵、おじよんまじよんま、はしの下の菖蒲は、咲いたか咲かぬかまださかぬ、みやう〳〵車を手にとて見たれば、しどろくもどろく十さぶろくよ

と、この童歌をとり入れた歌も出てゐる。この絵本の如き詞章も、当時存したことであらう。

第五類　童話の姿をとるが、大人の読物をも兼ねたかと思はれるものをこの類とする。黄表紙にも勿論童話体を真似た類があるので、前出の江戸の草雙紙に影響を受けた絵本に加ふべきかと思ふが、さ程に黄表紙的でもない。且つ次に例示する「絵本猿島六本杉」には、前に示した戸隠の鬼が女粧する絵本、狐百体の絵本と三部を合せて、「お伽三笑子点頭（とぎさんしやうこなづき）」と題して三冊一部とした後刷もあり、当時は他の絵本と同類と考へられてゐたものとしてこ

こに出す。

「絵本猿島六本杉」の筋は次の如し。「とつと昔のこと」はなかけ猿が集って、先祖は手柄があったが今は淋しい境涯である、一思案あるべしと相談。一疋の満足な猿が「今の世に九十九疋のはなかけざるが一疋のまんぞくなさるをわらふとは此時よりぞはじまりける」で注意したが、はなのさきちへの介など先立って浪速の京の田村麿鈴鹿合戦の芝居を見物にゆくこととなる。「ひたいにしわをよせ」「よいちへがござる。」など云ひながら、芝居の近所六本杉（太平記による）へ夜な夜な天狗とばけて出て、芝居近所の諸色をつかみどる。「ほうしと見せて太夫子かげまをつれゆきいろざけのたのしみおどりくるふてたのしみけるはよにめづらしきことどもぞかし」。これは何か、その頃の出来事を諷したものであって、ここの所は大人向である。天狗に閉口した芝居の者の許へ、かに江甲介と云ふ侍が来て、自分は蟹の眷属と共に、猿が島へ仇討に行った所、どこかへ行って一疋も見えない。松の木末に見出した一疋の話に、天狗にばけて芝居へ行ったとつげた。今夜天狗が来ればからめ捕るべしと云ふ。「さること」もあらうと、捕へて、鼻をとると松茸をつけて居る。蟹共は猿を退治し、一疋の満足な猿は、鎌倉へ筋を求めて頼み、「むまのきたうをつかまつれと、ありがたき御じやうゐ、げにおさまれる御代ぞとて、子どもあそびのむかしばなしも、興あるはるののどかさよ、むかし〳〵はりまつこ、さるのしりはまつかいだといふことのはも、此ときよりぞめでたかりけれ」で終る。一種の猿蟹合戦の変型であるが、前述の世事を諷刺的にはめ込んだ所が、新しくもあり、大人向の所以でもある。

## 五

以上私は出来るだけ具体的に、従って手めかしい紹介を、つたなくつらねて来た目的は次の数点にあった。一は僅かな見聞を上げたが、恐らくこの幾倍も存するであらうこの種の絵本への留意と発見と研究を、同好の士にお願ひすることである。そのことによって乏しい江戸時代の童話本資料が、豊かになることを希望する。二に以上の貧弱な例示本からも、童話絵本の詞章の作者達は、かなり童話の蒐集にも関心を持ってゐたのでないかと思はれる。明和、安永の頃は、「山家鳥虫歌」（明和八年）の如き地方歌謡の蒐集。越谷吾山の物類称呼（安永四年）の如き方言集の出版。「西播怪談実記」（宝暦四年）や「太平弁惑金集談」（宝暦九年、安永五年怪談重問菜種と改題出版）の如き民話集の出刊など、数へ上げれば今日で云ふ民俗学的なものへの興味が一般的であった。この童話絵本もその風潮の一端を示す。この民俗学的な風潮は、国学の流布や、社会関心など当時の文化思潮につらなるもので、も少し具体的にしなければならぬと思はれるが、これもその一資料であらう。三に、童話の如きは、当時としては文学の最底辺にあったものだが、吹寄や地口やその他、黄表紙の如き高級文化人の遊戯文学における発想や趣向や技法に共通の所があるのは、さうしたものの社会における滲透度。或はその逆に社会一般の傾向の高級文学における洗錬化。広く見て、明和、安永文学の具体的な社会基盤を求めるものには、僅かながらも資料となると思はれる。四にかかる童話絵本がも少し出そろった暁には、江戸の赤本・黒本・青本と比較して、上方、江戸の出版物の交流、相互作用を調査する好資料ともならうかと考へる。

しかし、資料としてこれらを使用するのは、他の方面の資料との総合比較を待たねばならない。よって、別の機会に残して、此の度は紹介のみで筆を擱く。